

書かれた衣服—魅力ある研究誌のつくり方

東京大学教授 木下直之

早稲田大学教授 塚原史

京都女子大学 成実弘至

デザイナー 堀畑裕之

WRITTEN CLOTHING: HOW DOES THE RESEARCH JOURNAL GET ATTRACTIVE?

Naoyuki KINOSHITA, Professor, University of Tokyo

Fumi TSUKAHARA, Professor, Waseda University

Hiroshi NARUMI, Professor, Kyoto Women's University

Hiroyuki HORIHATA, Designer

More than thirty years has passed since the first issue of *Dresstudy* was published. The environment surrounding fashion research has been improving in Japan. As the media through which research achievements are published, media formats differing from conventional print are attracting public attention, such as electronic publications.

We invited those who have been associated with KCI's activities or this journal, and requested them to explain their ideas about paper vs. electronic media, fashion research, and the significance and potential of fashion research journal including *Dresstudy*. Four people share their ideas in this article: Professor Naoyuki Kinoshita, Cultural Resources Studies, University of Tokyo; Professor Fumi Tsukahara, Studies of Culture and Representation, Waseda University; Professor Hiroshi Narumi, Fashion Studies, Kyoto Women's University; and fashion designer Hiroyuki Horihata of the brand *matohu*

『ドレスタディ』創刊から 30 余年。国内でもファッション研究を取り巻く環境が整備されつつあります。一方で、研究成果を発表する場として、電子書籍など従来の印刷物とは異なる出版フォーマットが注目を集めています。

ここでは、KCI の活動や本誌とのかかわりのある方に、紙媒体と電子媒体、ファッション研究、そして本誌を含めたファッション研究誌における意義や可能性について語っていただきました。ご協力いただいたのは、木下直之氏（東京大学教授、文化資源学）、塚原史

氏（早稲田大学教授、表象文化論）、成実弘至氏（京都女子大学教授、ファッション研究）、堀畑裕之氏（「matohu」デザイナー）の4名です。

以下は、それぞれの方の発言をテーマごとに要約したものです。

1. 紙媒体であることの意義

木下：すべての印刷物が紙媒体で存在することは厳しいと思います。出回っている印刷物の量は半端ではないですから。収納できないから結局は処分せざるを得ない。

それでは、電子媒体の方が良いかといったら、情報の質の綿で不安が残ります。深く調べようとする、ネットだけでは情報が不十分であることは言うまでもありません。そうかといって、雑誌がそれに代わるか、そこを補っているかという、必ずしもそうではない。定期刊行物である以上、雑誌も期日に追われて編集をしているのが実情だからです。結局はコンテンツの問題でしょうね。それがどれだけ魅力的なのかだと考えます。

もし本誌が紙媒体から電子媒体に移行するのであれば、十分に事前のリサーチが必要です。読者が一気に広がる可能性がある反面、收拾がつかなくなってしまうこともあると思うからです。今どこにいるのかわからない無数の読者に向かって情報を発信することは、ウェブの世界では当然だと思いますが、本当にそれが届いたかどうかをどう確認するのか、あるいはそれが次にどんなステップで展開すべきかということを考えると、電子媒体での情報発信には疑問が残りますね。

塚原：紙媒体というのは、電子媒体の持つ意味とは違う形で意味があると思います。ひとつには書物のデザインです。テキストの発信自体は、ウェブ上でも展開できるし、それを紙にプリントすることも可能です。けれども、雑誌としての主張、こういうことをやります、という表明は、デザインされた紙媒体の方が伝わりやすい。持って歩きたくなる、ファッションの一部となるようなデザインを考えることもできます。かつての『平凡パンチ』にはそういう役割がありました。手に持って読むという行為は、そうしている自分を見ている人もいるということです。

持っていることの意味もあると思います。例えば、聖書。当然、電子版もあるでしょうけど、所持していることで、ある種のお守りというか、何か自分を力づけてくれる存在として働く面もあると思います。そして、「今日は福音書の何番」とページを開いて読んだりする。昔だったら、『ランボー詩集』を持って旅に出る、というイメージです。自分が選んでこれを持っているという感覚を得ることにおいても、紙である意味はあるのではないのでしょうか。

成実：雑誌自体はペーパーレスの時代になっていくでしょうが、紙媒体を出版することに意味はあると思います。ウェブマガジンは利益が出ないと聞きます。広告や付加価値で収益を上げるシステムが構築されるのかもしれませんが、ネットの場合、だれが見ているのかもわからないし、利益も出ないのでは、何のためにやるのか、意義が分からない。もちろん企業の宣伝や社会貢献が目的なら赤字でもいいのでしょうか。でも、紙媒体ならやり方によっては利益も出るし、目に見える成果を生み出すことだってできますよね。

堀畑：紙媒体は残りますよね。もしかしたら 300 年後もあるかもしれません。以前、KCI に伺った際、菱川師宣の『当世早流雛形』(天和 4 (1684) 年) を見せていただいたことがありました。今どう消費するかということだけでなく、そうしたものが残っていることで、300 年後の人たちがそれを見て感動することがあるわけです。そういう観点から言えば、物体としてあることは必要じゃないかなと思います。紙媒体のように、まとまったものとしてあると、ちょっとした瞬間に見ることができます。iPad をお店に置いていても、真剣に見ているお客さんはあまりいません。紙のほうがぱらぱらと自分のペースで見ることができる。ただ、今は過渡期ですから、今後は比重が変わってくると思います。

2. ファッションを語ることの可能性

木下：美術史や写真史のように、やはり作家(デザイナー)単位でファッションが綴られてきた歴史がある。その軸を外すことによって、また違う世界が見えるはずです。普遍的な人と衣服の関係について考える壮大な視点が必要かなと思います。服には、いくらでも普遍的な問題があると思います。広がりや深さを兼ね備え、他では触れられないような問題にも踏み込んでいく姿勢ですね。

服に関する関心は、老若男女を問わず、とりわけ若者には一番共有されているはずです。ただ、音楽やファッションに強い関心を持つ高校生や中学生がとても大きなマーケットを形成しているけれども、そこには確実に情報を送り込んでいるかという点と必ずしもそうではないと感じます。ファッション業界にいない人間が素朴に感じる疑問に対応しても、問題意識を受けとめていくことが大切だと思います。

塚原：ファッションに直接関わるわけではないのですが、パリのポンピドゥー・センターが出版していた『Traverses (トラヴェルス)』という雑誌がありました。ジャン・ボードリヤールが編集に携わっていて、「領域を横断する」とか「抜け道」という意味のタイトル

が示唆しているように、思想を現在進行している現象とシンクロさせて考えようとしていました。当時のエスタブリッシュメントに対する異議申し立てという面があったでしょう。そういった姿勢を正面に出すのは、現時点では効果的かどうかわかりませんが、社会的なパースペクティブを持つことは大事だろうと思います。

また、ロラン・バルトの『モードの体系』の中にあるように、ファッションというのは、表層的な文化でありながら、その時代の深層的なメンタリティーとか社会の仕組みに根ざしたものです。ある意味でファッションというものが、ほとんど社会全体と等価であるような広がりを持っている。社会の一部というよりも、社会そのものが本当はファッションなんじゃないかと考えることもできます。服飾研究には、現在進行しているファッションの研究と歴史的な研究とがありますが、ファッションを成り立たせている社会への視線というのも大事だと思います。

成実：1980年代は、哲学、文化史、美術史の流れのファッション論に素晴らしい仕事が多かったと思います。現在はそういう理論や分析もいいですが、具体的な服飾産業の行方が気になります。私は大学のゼミで『ファッションクリティーク』という小冊子を作っていました。その記事のために学生たちと産地に取材に行きましたが、若い世代はもの作りの現状がどうなっているか、高い関心をもっています。それらは将来的になくなる可能性も高い。もの作りの工程を文章や写真で記録するという行為をしっかりとやる必要があると感じました。

また現在、パリ・モードの存在感が以前に比べると弱くなっているようにも見えますので、逆にパリ・モードの意義をきちんと分析するような研究も、これからのファッションを考える上で必要かなと思います。

堀畑：学生の頃、歴史的な衣装に興味があって、仲間と「歴史パターン研究会」を作り、様々な時代の服の型紙を実際に縫ってみたり、自分達なりに取り入れて今着られるような作品アイデアにしていました。そのことは自分の仕事の一つの原点になっています。現代はファッションが消費財と考えられる風潮がありますが、他方作り手が美しさを追求してハサミを入れたアートのような服もあります。それは物との対話であるといってもいいでしょう。服には色々な側面や価値がありますが、そのなかでも物づくりのアイデアや真摯な探求心は、作り手だけでなく多くの人を刺激すると思います。

歴史や物事を深く理解した上で、そこから新しい何かを伸ばしていく、そんな理解を助けてくれるメディアが今は少ないので、幅広い豊かな情報が提供できれば、『ドレスタディ』

は世界に誇れる冊子になるのではないのでしょうか。

3. 魅せる研究誌を目指して

木下：商業的なファッション誌は読者に幸せな気分を、研究誌は知的な刺激を与えるはずです。勿論、服飾が起点であることは譲れないけれども、ファッション研究誌の情報の量よりも視野を広げていくことが大切だと感じます。

『ドレスタディ』に関していえば、面白い話題がいっぱい入っていて、ひとつひとつはすごく練られたテキストだと思います。けれども、読み切りで各論考が短いため、問題の展開あるいは発展を考えると、いつも入口まで行って終わってしまっている感がありますね。定期刊行物であれば、毎号の特集や目を引くテーマの設定、それから連載の形があります。ただ、それを紙媒体の中だけでやり続けるのか、別のメディアに展開させるのかどうか、あるいは紙とウェブを組み合わせるのか慎重に考えた方が良いと思います。

塚原：『ドレスタディ』は、レイアウトや写真のレベルが非常に高いと思います。研究的な面があり、いわゆる流行通信的なものとは違う。これからさらに積み重ねていくことで、より参照価値が出てくるでしょうね。

想定される読者層の問題もありますが、服飾が持っている広がりをも多方面において考えることができると思います。例えば、ポール・ポワレはダダイズムを始めたトリスタン・ツァラと 1920 年代に交流があった。そこから考えると、ポワレの文化圏は、当時のアバンギャルド・アートに広がっていきます。ジャポニスムとの関わりもある。

それから、今の日本だけの現象かもしれませんが、ファッションが一見個性的になっているようで、ある意味で画一化されている状況がありますよね。そうした大きな流れに対して、思想の表現としてのファッションというものを主張していくとか、ファッションを提案的にとらえることも『ドレスタディ』には求められているのかもしれない。

成実：魅力のある内容にすることが大切ですね。お金を出しても欲しい、何としても読みたいという内容をどう作っていくか。しかもそれをいかに現代の空気感のなかでするかということです。

『ドレスタディ』への提案としては、良い意味でよりアカデミックにする。日本における服飾研究の基準を示していくという姿勢をもってほしい。例えば、世界のファッション研究を意識した研究誌。イギリスやアメリカだけでなく、イタリア、スウェーデン、オーストラリアなどでファッションに関する研究や書籍がいくつも刊行されているのに、日本

ではあまり出版されていません。日本のファッション研究そのものを活性化するためにも、安易な一般受けを狙うより、きちんとした研究の礎となるのが研究誌のあるべき姿だと思います。

堀畑：『ドレスタディ』の手に取りやすい判型は気に入っていますが、ヴィジュアルや魅せるクオリティ、レイアウトにもっとこだわるのはどうでしょうか。また全体的に論文が多いので、慣れていない人には噛みごたえが硬い本ですね。噛めば噛むほどおいしい料理のようなものとはいえ、今は柔らかくて親切すぎる食べ物ばかりですから、どんな硬さにするか。そのバランスを一考する価値はあると思います。

内容に関しては、様々な角度から取材し考察する研究があると良いですね。ファストファッションなども、実際に作っている国や現場を取材すると違った知見が得られるかもしれません。今動いているファッションを、歴史研究者ならではの視点で深くスタディするのも、後世に残る仕事かもしれません。例えば他にも、昔の衣服が実際にどうやって着られていたのか、どうオシャレしたり、いかに作られていたのかなど、現代の自分の生活に引きつけて考えられる記事は読んでいて楽しいですね。

理想論としては、やはり研究を通して「過去」を「今」に活かす、同時に「未来」を創っていくような指針を示すことができれば素晴らしいと思います。